八千代市井戸向遺跡出土の三彩陶器

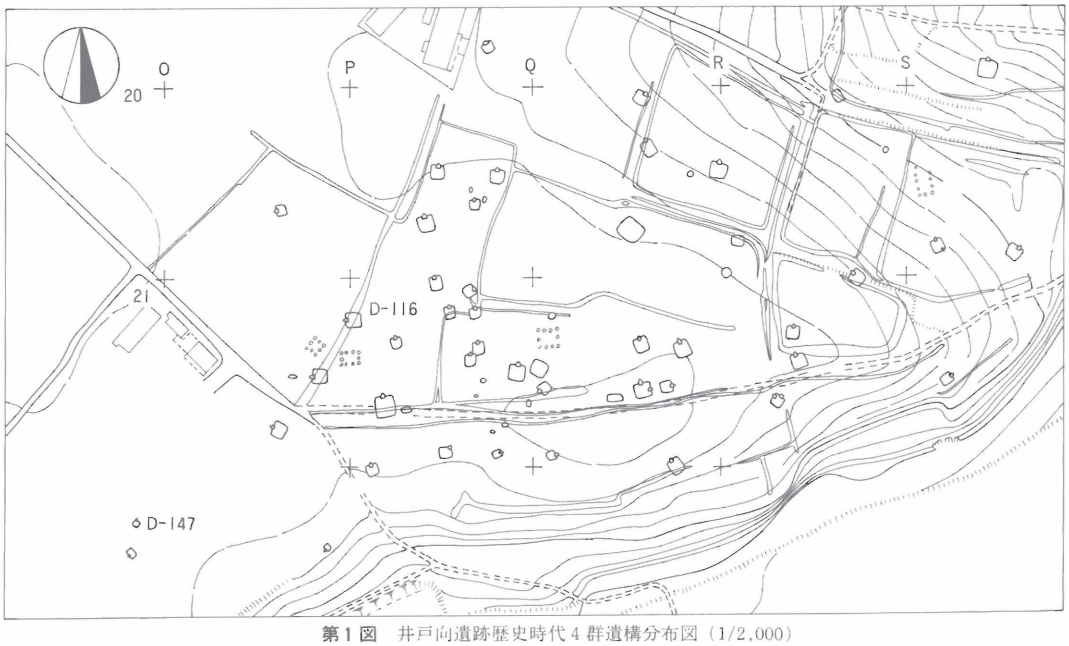
大　野　康　男

1．はじめに

八千代市井戸向遺跡は，八千代市を南北に流れる新川を東に臨む標高15～24mの台地上に立地している。この地域は，住宅・都市整備公団の八千代市萱田地区土地区画整理事業に伴い，昭和52年度から当センターによって発掘調査が進められている。井戸向遺跡についても昭和55年度から本調査が開始され，昭和62年度には，昭和57年度までに調査が終了した70,799m²について調査報告書が刊行されている。(註1)しかしながら，用地等の問題で昭和58年度当初に約16,000m²が未調査地区として残されていたが，その後順次調査が行われ，平成元年度には5,400m²を残すだけとなった。ここに紹介する遺物は平成元年8月1日に調査を開始した井戸向遺跡9地点のD147竪穴住居跡から出土したものである。

2．遺跡の概要

井戸向遺跡は萱田地区のほぼ中央に位置し，奈良・平安時代の遺構は竪穴住居跡149軒，掘立柱建物跡44棟が調査された。これらは8世紀後半から10世紀初頭という年代が与えられ，調査報告書では遺跡全体の建物群を4群に分けて捉えている。この“群”は基本的に地形によって分割されるが，群によって建物の変遷，墨書土器等に様相の違いを見い出すことができる。ここに紹介するD147は，このうちの歴史時代4群に含まれるもので，井戸向遺跡においては遺構の分布密度の低い一群である。歴史時代4群は井戸向遺跡の南端に当り，遺構が分布する範囲は他の群より広い。しかし，4群を構成する建物は全体で竪穴住居41軒，掘立柱建物4棟で，歴史時代1群や3群と比較して遺構数は少なく，また，掘立柱建物の数が極端に少ないのが特徴である。時期的には8世紀後半から9世紀後半にわたり，井戸向遺跡の中ではある程度連続した変遷が辿れる。

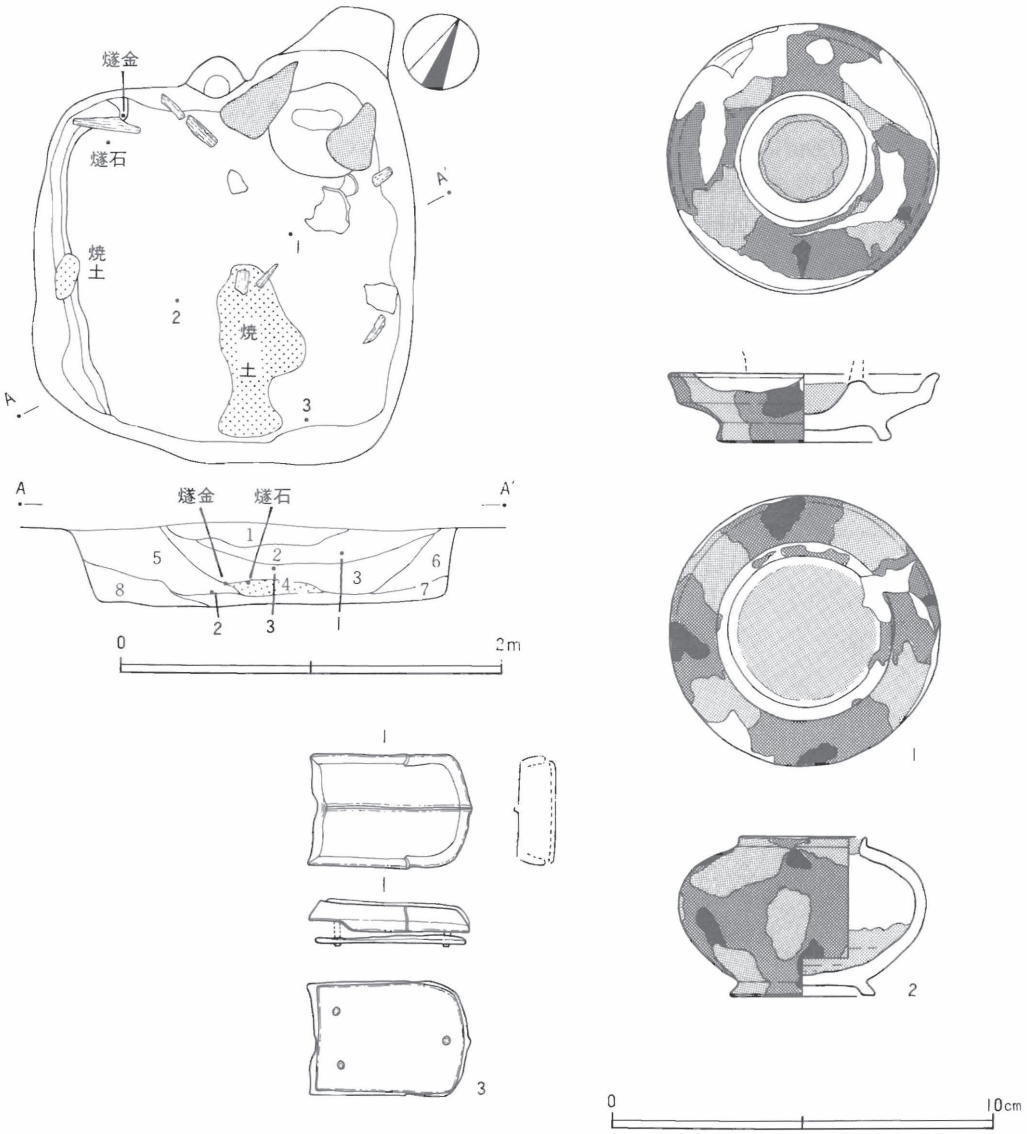


第1図　井戸向遺跡歴史時代4群遺構分布図（1/2,000）

3．遺構の概要

D147は歴史時代４群の西端に当り，N22－38グリッドに位置する。D148と近接するが，歴史時代４群の中心から外れ，遺構の密度は極めて低い。住居の規模は2.0m×2.0mの方形で，住居北コーナーにカマドを設置している。軸方向はN－28°－Wを指す。確認面からの深さは0.4mで，覆土は床面から10cm程度の厚さに炭化粒・焼土粒を含んだ暗褐色土が水平に堆積し，その上に焼土あるいは炭化材を多く含んだ暗褐色土がレンズ状に堆積している。最上層は自然堆積と考えられ，僅かに焼土粒を含んだ黒色土が10cm前後の厚さに堆積している。遺物のほとんどは焼土上面に堆積している覆土３層から出土した。炭化材は細片が多く，10cm以上の長さを保っているものは皆無に近い。しかし，覆土４層とした焼土は緻密なもので，他の場所から廃棄したものとは考え難い。炭化材や覆土の状況から，上屋を残した状態で火を受けたとは考えられない。なお，覆土３層には炭化米を主体とした穀類が含まれている。

床面は特に構築したものではなく，堀方に若干手を加えただけで，完掘した状況では床面に凸凹が見られる。壁溝は南西壁だけに検出できたが，壁に沿って僅かに低くなる程度である。なお，南



第２図　D147及び出土遺物実測図

東壁に沿った床面の一部が巾40cmにわたって幾分高く掘り残されている。この他に，柱穴等の施設は検出できなかった。

カマドは住居北コーナーに設置されている。北西壁中央に，壁が小さく張り出す部分があるが，壁・床の状況からカマドの痕跡ではないと考える。カマドは使用されており，最終的に使用された状況は，以前に崩落した天井部の上にカマドを構築している。煙道部は住居コーナーを大きく改変することはなく，確認面に近いレヴェルでかなり緩やかに張り出している。カマド内には小形の甕が正位で遺棄されていた。

遺物は住居中央の覆土の3層から多く出土している。ここに紹介する三彩托も覆土3層から出土したが，三彩小壺・燧石・燧金は覆土5層から出土した。なお，覆土3層を中心として炭化米が含まれている。

4．遺物の紹介

托（第2図1）口径7.2cm，高台径4.6cm，現存高1.8cmを測り，受け部を欠損するが，他の部分はほぼ揃っている。口縁部は外反気味に短く立ち上がり，高台も低く外方へふんばる。受け部は欠損するが，欠損部での外径は3.7cmを測り肉厚である。この状況からも受け部がある程度の高さを有していたと推定できる。施釉は4単位で，釉調は緑色釉の発色が極めて鮮明で，ややくすんだ淡緑色を呈し，透明釉は若干緑がかる。褐色釉は褐色ないし黄褐色を呈し，やはり緑がかる部分がある。受け部底面及び底部外面は透明釉である。釉の遺存している部分は美しい光沢がある。胎土は非常に精緻で，軟質である。胎色は淡黄色から灰白色を呈している。なお，口縁部にも欠損部分があるが，受け部の欠損部を含めて端部が黒色にススけており，灯明皿として転用したことが窺える。あるいは，井戸向遺跡に搬入された時点で，既に受け部が欠損していたのかもしれない。

小壺（第2図2）口径3.3cm，高台径3.8cm，器高4.2cmを測り，完形に復原できた。胴部の最大径は胴部中位より若干上位にあり，6.6cmを測る。口縁部は短く直立し，高台も短く外方へふんばる。施釉は4単位で，托と比較すると釉薬の遺存が悪く，褐色釉は比較的鮮明であるが，緑色釉はかろうじて識別できる程度である。胴部外面は全体に光沢も失われているが，胴部内面と底部外面の透明釉は光沢を残している。この光沢を考えれば，胴部外面も本来の釉の発色は良かったのではないかと考えられる。胎土は托と比較するとやや砂質で，硬く仕上がっている。胎色は淡黄色から青灰色を呈している。なお，内面に黒色の付着物がある。

この他の遺物

住居西コーナーの覆土5層から燧金と燧石が近接して出土した。燧石は細片となっている。本住居に堆積している焼土・炭化材との関係が想定できる。鉈尾（第2図3）は住居東コーナー付近の覆土3層から出土した。全長4.3cm，巾3.0cmを測り，表金具・裏座とも遺存している。材質は銅で，現在の表面は黒色を呈しており，烏油腰帯(註2)と考えられる。裏座は3本の鋲で留め，褐色の付着物が周縁部にある。表金具は巾2㎜の隆帯が横断し，両端部とも宝珠様に造られている。裏座は方形に近く，先端部に若干丸味をもつ。

5．まとめ

三彩陶器は萱田地区でこれまでに2例が出土している。1点は同じく井戸向遺跡の歴史時代4群D116から小壺の高台を含む破片が(註3)，もう1点は白幡前遺跡P016土壙から完形に近い小壺が出土している。(註4)。白幡前遺跡例は土壙からの単独の出土であるが，井戸向遺跡例は今回紹介した資料も含め，いずれも竪穴住居跡から出土したものである。井戸向遺跡D116は土器の様相から井戸向遺跡IVa期，即ち，9世紀第1四半世紀から第2四半世紀にかかる年代が考えられている。今回三彩陶器が出土したD147は，ロクロ土師器坏の様相から，これよりも若干古い井戸向遺跡III期，即ち9世紀第1四半世紀を前後する年代が考えられる。

遺構の埋没状況は住居廃絶後間もなく埋め戻されており，その過程で僅かに材木等を焼いたと想定できる。三彩の出土状況は，小壺が火を入れる直前に，托はその他の多くの遺物と共に消火してから住居内に置いたものである。

三彩托の出土例は全国的に見ても非常に少なく，ここに紹介した資料を合わせて5例を数えるに過ぎない。これらの出土遺跡は平城京が左京八条二坊四坪（註5），京都府上津遺跡は泉津推定地（註

6），福島県小浜代遺跡は寺院跡（註7），群馬県十三宝塚遺跡は寺院跡もしくは官衙跡が想定されている遺跡である。（註8）。このように，現在までの出土例は通常の集落遺跡とは異なった性格の遺跡であり，井戸向遺跡から三彩托が出土したことはまったくの異例である。また，出土した住居跡も一辺が2 mという小規模なもので，出土状況も併せて今後詳細な検討を加えたい。

今回は類例が非常に少ない資料だけに，速報的に資料の紹介を行うにとどめた。大方のご批判，ご教示を願う次第である。なお，今泉潔氏，郷堀英司氏から資料の提供とご教示を頂いた。記して感謝する。

三彩托出土遺跡一覧（註9）

遺跡名	所在地	種別	他の三彩
小浜代遺跡	福島県富岡町	寺院	水瓶
十三宝塚遺跡	群馬県境町	寺院・官衙	火舎・坏
上津遺跡	京都府木津町	津	小壺・蓋
平城京	奈良県奈良市	都城	各種
井戸向遺跡	千葉県八千代市	集落	小壺

註

1）藤岡孝司「八千代市井戸向遺跡」（財）千葉県文化財センター　1987

2）令制で規定された銙帯ではない可能性が高く，実際に腰帯の鉈尾とは速断できない。

3）「八千代市井戸向遺跡」545頁
高台径4.0cmを測る。釉調，胎土，胎色は今回紹介した托と肉眼では区別できず，同時に搬入されたのは確実であろう。

4）口径4.1cm，高台径4.0cm，器高4.4cmを測る。施釉は4単位で，釉の遺存は悪い。P016は直径1.5mの円形を呈する土壙で，他に遺物はない。白幡前遺跡は現在整理作業中である。

5）篠原豊一「奈良市埋蔵文化財調査報告書－昭和56年度－」奈良市教育委員会　1982

6）松本秀人他「木津町埋蔵文化財調査報告書第3集」木津町教育委員会　1980

7）馬目順一他「小浜代遺跡　第1次発掘調査概報」豊岡町教育委員会　1970

8）群馬県教育委員会文化財保護課「十三宝塚遺跡発掘調査概報」1～3　群馬県教育委員会　1975　1976　1977
「日本の美術No235陶磁（原始・古代編）」至文堂　1985

9）三彩托出土遺跡一覧は，「日本の三彩と緑釉」五島美術館　1974,「日本の美術No.235　陶磁(原始・古代編)」至文堂　1985及び註5～8の各報告書を参考にした。